

門外  
流 3975  
卷



未孟春四月製本

三田直吉



早稲田大學圖書館  
藏 27.3.5 文書

部 猶 大



八丈富士

大く  
雲の  
月る

小嶋  
為朝明神社

小嶋  
根屋



四十百十

ハカマの常の食糧ニ  
 葉ハ年毎まつて根ハ  
 三冬を待て取後ハそま  
 してふふふふと唄し

あーた仲



赤とんぼ  
 六月不鳥  
 あら



其の始り  
 蛸中園  
 二十  
 年



赤魚  
八丈鯛

形ちいさき身も味も  
鯛子似れども  
兒白ひあり

赤魚形ちかきこま  
似多し身は白く味も  
ろしんれん  
かひ



三  
三  
三

大御見物の女  
 角突の跡まで  
 盆踊り



五月廿七日  
 午の角突まで  
 て膳原とこ  
 ろを盆中や  
 るり踊り  
 も又いさげ  
 もつり手  
 盆の月又  
 突やあま  
 もてーち  
 て川か  
 かーおの  
 んと  
 のを  
 け



海老部

此海老みえ

所 あり海老と  
か かりしと申  
身 ありとる味吉し





鳥のまの傍に五穀虫をむ又ツ華  
 雨も降りてその後の中のものを食  
 つくもその水は湿を防ぎ華を防ぐ  
 為よ床と言ふは柱へ釘をさしたるも  
 華のむくをさるる乃ち又柱と華を  
 みるも華の登るを馬きてこゝの海

こゝに竹ちし  
 立ちけおけい  
 華あふると  
 のけりへとも  
 りせに

髪の色をて長し 髪は長きならんは  
 髪は老若とまよつとあをみりありし  
 皆まよとまよのことし つらぬ



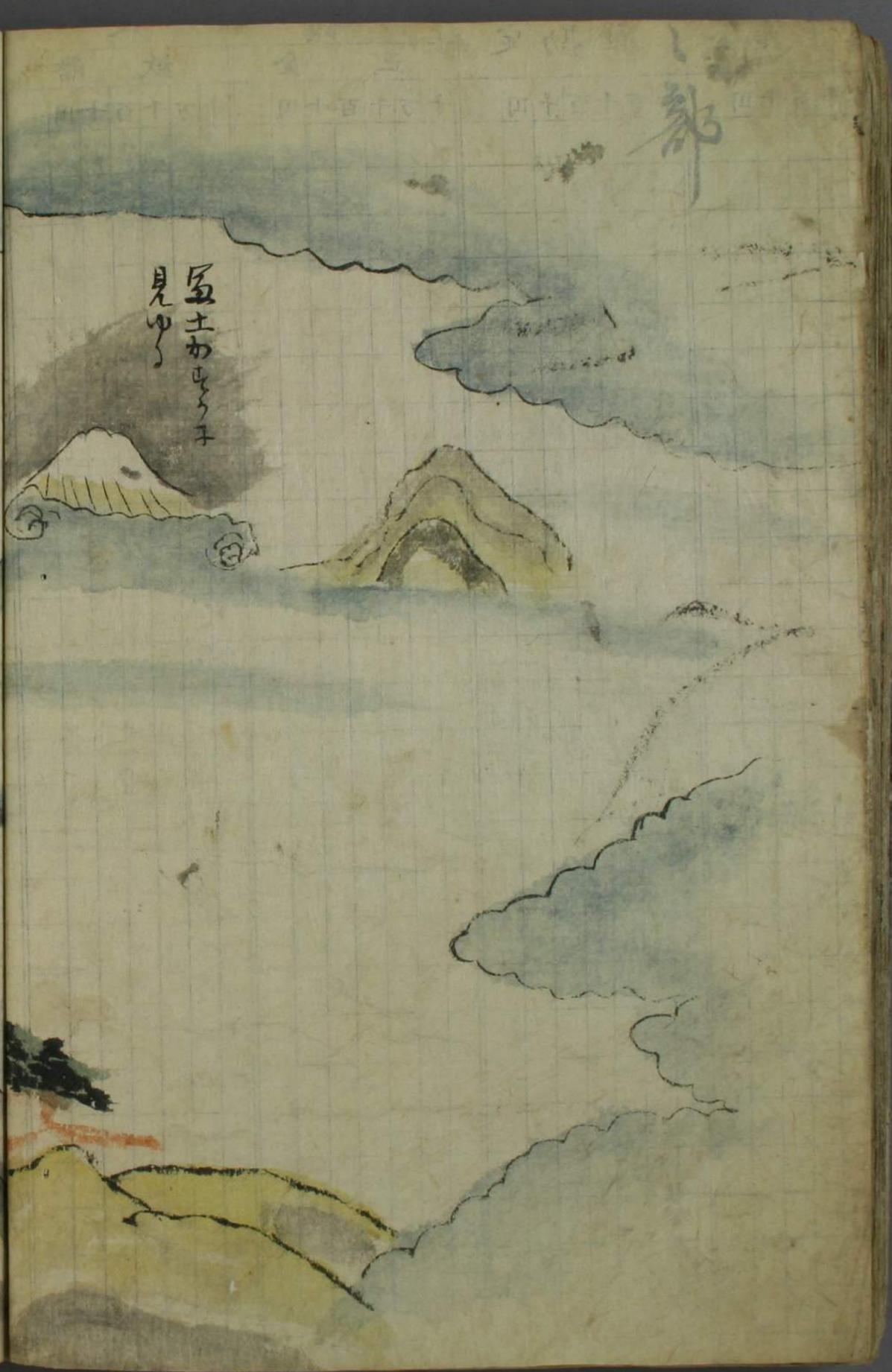
小児の髪をけしよ沙  
 髪を唐人よとよきを  
 宝曆乃ちの南京人漂流し  
 て八丈島に奉と重なり  
 つひつを見たるよりわく  
 るりしあつとあるゆ



髪  
 母  
 髪







ほろ白の中よまきろまきあ  
ゆうりりよやう人にとた  
こまこま

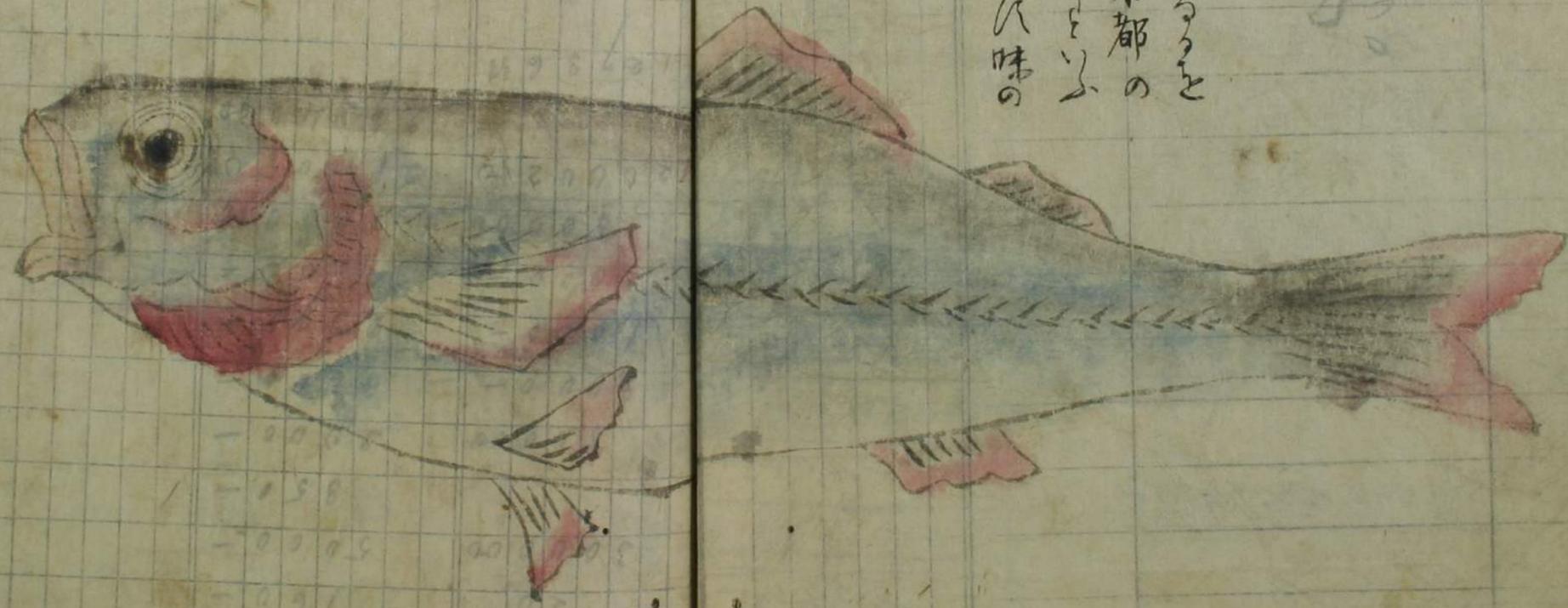




新島の子供のり  
 古きとんまを  
 つりま南の長き材本  
 舟業のり  
 女の業

魚

鯉



新鳴子大阿ちあつて三足斗なるを  
身味高し形ち長く東都の  
阿子形なるる一鳴あをよ  
このこしく形ちこしくかひ味の  
手とをさうまかくるるや

勤吉。法利庵。非カ。

金 四十百十

要 施

伊勢丹文 節選村才

四十百十 四十百十

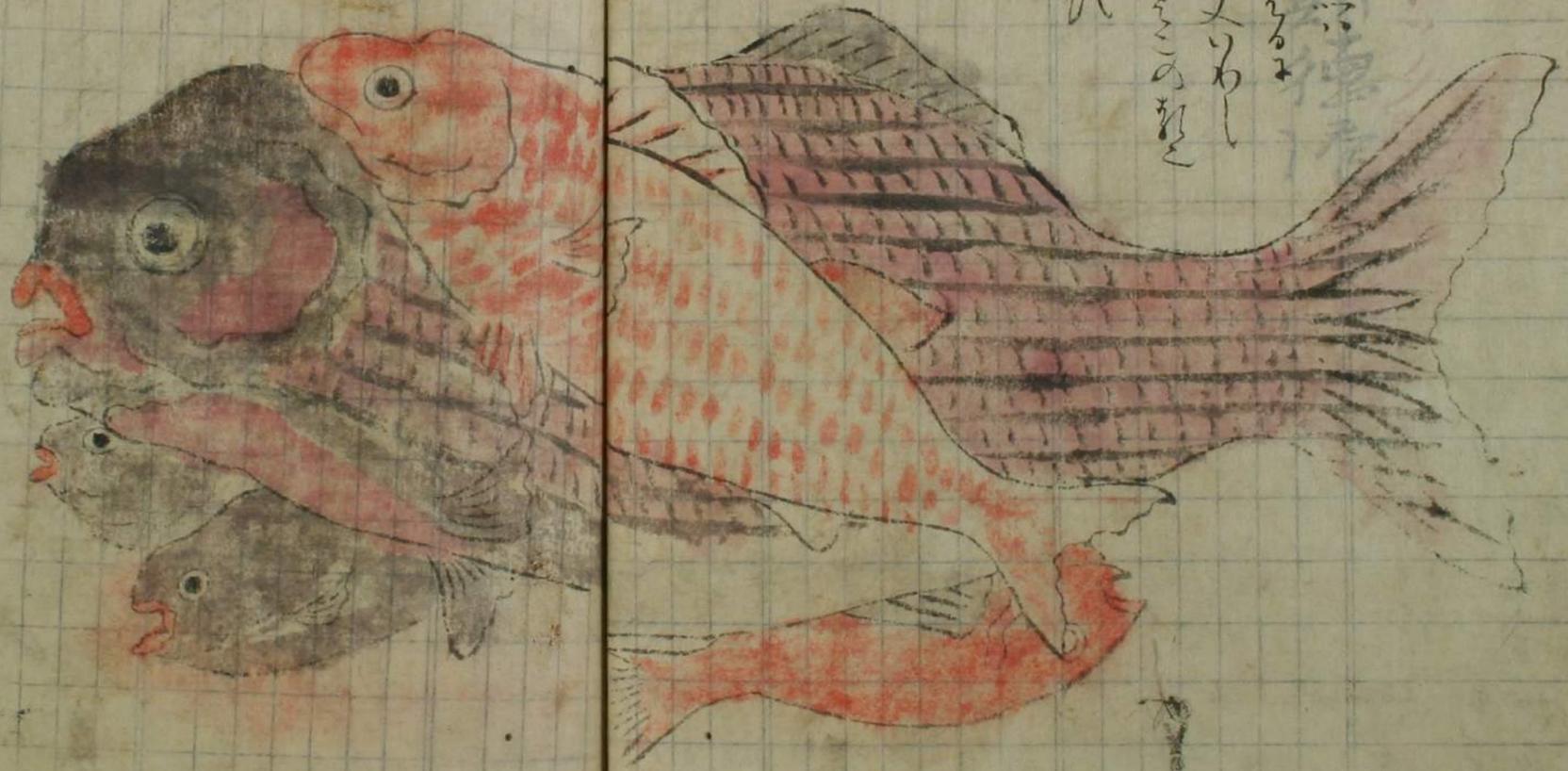


八五鳴乃孝子者之無又七兄弟之新ハ  
娘より二母也一未儀とたまひつる所  
うううと云りつとるむてん  
りーと云



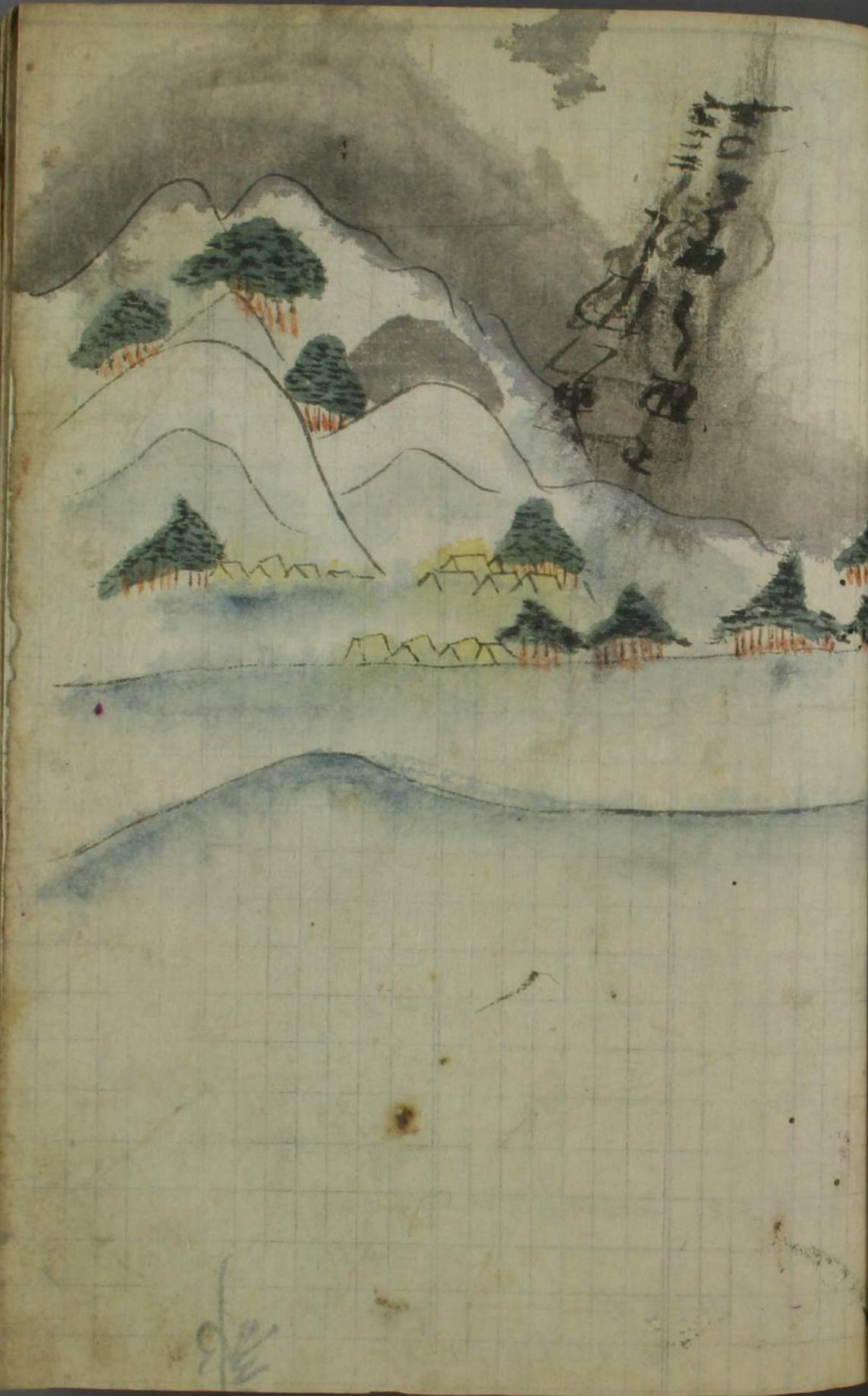
部

きし魚に性多し...  
至て下品也又此紅の魚は  
皆人ま名とあふい又細きものを  
何うも又名たこもふい又りわし  
と云ハ小魚に京都のるまびきとの類と  
陸りりましてみ陸かまふ



魚 部  
魚 部  
魚 部

魚 部  
魚 部  
魚 部



白砂山

遠く見ると雪を  
 斗いといふ山に  
 ありては風流を  
 みる

部

河

寛政八兩辰未お月十日あり四日の己れ時より小門出て  
嶋ゆり乃用意志なる八丈の船なるのり後りけるありとも馬乃  
いぬむ希とて送る来る人多うとう皆々名残をいふかゝるし  
小船のりりもさきうぬさうあつて日とくれぬ川に旗炮筒乃沖  
よぬ多をやり

一十五日今日浦賀のありまへとあつて風とるをさし  
て品川の海に船をほたく

一十六日今日この帆をあらうにぬのりて降出てゆき急神奈川乃  
俵に船をよせるきのふよりれ海乃むつうき之こつうれ多川に  
神奈川の驛より中よりと定給ふ

一十七日今日申すはかふも愛もあんとて午の船とる以楫返あは  
るり風よくなりぬりて我々こくまでより出ま浦賀近に指  
余里なりより未乃時とるころは暮るなり

一 十六日夜の明を待てて三宅の浦を過ぎて小

綱代と云ふ所の傍に家居もあつておるいふあり

一 十九日風あり

一 廿日辰乃時より二兩催し大風をけきハとて船をあし

片乃時より大島乃沖に至る浦にも風をけきハとて風もた

やうなれい出三宅嶋と云ふ所より出たはちかくなつて風も

ハ東へくとむきまに方のつう東乃言ちうれ行汝波

ゆり多てらう楫の音震動雷天もことなりす

ひもたぐもさう飲食もこもに立鉢巻一腹とあて船をこ

よころいぬてたう神子祈佛このむとそこ一北も東乃

海はハソつこさいしきあてもぬ一楫をぬのこ安房の國を

やう入陸真乃こヤソつとつとも楫取の言葉をもぬのむ

のこ此上あり西の風吹出ぬ人ぬき島或ハ

ぬぬつも行へくソつとつとも生ぬんどの海もこ

こふたう川ぬぬちて東の方に目をさすけるも

一 廿日今朝ハ沖海も少一を船をたなうて中り

よあつ人も是よ力をけて航あつたふ風あり

せめて新島の大島と移るふ内大島近くたれ

ハ北も東乃方へ流る楫面うふハ是非もなき

西よ島よ南とせりあひ侍る北候まてハ船を

一 廿日辰乃時より大島近くをうて一里ハあ

るうと云ふんこ凡出うたせめてハ國地乃方

北はよのむほいこつとらうて伊豆の何名乃

ぬ病者乃とくぬぬいあ一人の家も後んと

へ宿りと定まふ此二日二夜もあましくしよまきかして陸地を  
とつら中まき船ありつゝあつとぬけあつとあるよとをう

あつとる。

一廿三日辰の時中より小雨ありおしよものきつうとてころろと  
地を休めぬお今近ハ天氣よくあきすれハ渡海にふきよの  
とのこあといしよ遠く仲は出する船のあきまてられあつと  
あつとるしよまきふなしとつとを初てきつうとる

一廿四日辛卯ハ東北の風をけし岸のたつと時きぬ雪の降  
うとつとあつとつとつと傾風ありとて進きあつと下田の  
渡をさしてけりあつとつと風をつとつとつとつとつとつとつと  
とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

一廿五日風よりうへへて爰にあり

一廿六日丙午とちうきと下田のつとつと材寄りとつとつとつとつと  
船をむとてまきふ船あり陸地をうとつとつとつとつとつと  
三十町斗の岸を越て材寄り至つとつとつとつとつとつとつと  
う中も間つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

一廿七日より廿日まで帆をけし日初あつとつとつとつとつと  
一廿八日風よりとつと船より又北風烈しとつとつとつとつとつと  
一廿九日今朝も北風強つとつとつとつとつとつとつとつとつと

して出つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
あつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
らんまおつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
う風はつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
風のよれつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

たるや折しもまのあやもぬ海を多磁石  
の針をのこぬのてしうらむるたう  
くありぬ

一 八丈島のしんせうつゝ八丈島をけさ近こ同めらるるを悦  
びし事限りあり船も共ハ八丈島といふをいむとあり  
とを呼のうひる人にも忘れてハ八丈島といふものもあつた  
あうに必我物といふ屋しを建てし人もあり何故かまていむ  
とに其より知り仰ぐはしりもあうそも此八丈島の遠  
海の孤島にして多やまの海を鳴りてハ國地より巳午乃  
方をこつてあふとんを舟子駕といふてあり此一駕をのけたの  
みして舟子のお屋をさうりつもの少きを祈りよもたそ  
つらきうせはしあつちの海にともはれあやまうてのうらせ

行先ハ八島もあつ國もあつ子里斗をさるハ湖水知りて  
血をそけたるうとくたしこれと赤しをとよそをこつに  
流し入る船はゆるとたしと云傳ふさうつは八丈島一舟  
乃きつともやぬうりけん駕といふもつ十日あまう流し  
赤湖といふとも生靈を命あり神の思のまに酒吞物喰て皆  
こよのふくふうこつちうて只死をやりしうりありしうら  
まけあつしハ日本のあつちを何んと神仏は祈ひい  
る其應誰たりんらや東南より吹来るつあまのまけぬ  
いで雲とありもさうぬ中をちとんしつにうしつたあ田  
夜もつてなまつて是よりつらあるんを窺うるハ八丈  
鳴りてつらる是業をこそ死滅出て一生を悟たりとそ  
りあふ昔もあつたを述ころもつらまて難無きうり  
といふるまをくつらうとまはれあり多る船のあつた赤湖

はるうれ入るもやあんと云不思議も迹違えり多  
その二人追違てくましく物語をきたるを其終きりぬ  
かゝるゆゑを稀句いとも年毎にわづらふ船の無難なるいさな  
一 北八丈嶋を隣ニテある丑寅のあたりに未申のあたりに  
八重根といふ中より神湊に出入せり船をほけんといふは  
波のうらやまて八重根に着嶋の海にあしくおそろしは是を  
もきる船にまじり岸近く来た船も八重根神湊に波浦多てハ  
船をよめるてかるとんをりくも波濤を凌ぎて来るういもあ  
まの國地引返は是出るとりさへる所は湊の西南の  
きく待て黒金のとら岩不ぬいさるるまたうへに  
うもるうとくもして隣甚きま一船をりい丸右の岸へこ  
る申あていぬ一はれいこそ流をよせりけていづちるた  
ちて目のまはあはれいこれいさるるはくかかぬか  
とらうへの中は中あつとらまをいとい目出度りか  
と船より遠くはれい船楫うらういさあの中へあゆ  
のいさるうち海にたうきのあやうのおそるきいふ魚や  
あもあふいこのあゆみの板も國地あはれあぬくあゆ魚  
まういにつきたる嫌にさにいさるるもあわゆる人の心に  
其折をまらうけり思ひあつとらうのまらうきさにあ  
まらうもきいこのいさるの長もむらて積入るあ  
あつあをさせてか船よりてはとちうき前湊のま  
まら石系まで船をりあつとらういさるいさるお船に  
りつ水のごくよつあつとらういさるいさるいさるい  
中もハ八丈の見る内子岸のむらたかりあつとらうい  
いさるいさるあつとらういさるいさるいさるいさるい  
も見たり目もいさるいさるいさるいさるいさるいさる



るをとりふかくやつなるすまわひ多き大形ハモト  
ハ十歳九十歳の志を秘ししとせしまゝと鳥中子目の志  
たるもの一人もなかり麻病まれるありしり少くも  
あるはんとと申すも産を産てかろし家毎に子もあ  
十人より十四人産を産ししり産ハ蘇食して心を  
あせしるおつり仙境のあもむきつりて養生の志  
あつり

一 十日今日有魚とふよのを持美かつりハあき  
紅也其うつりしきあふあふの類あハ海中  
化して魚とこなるやとたしれあひぬ身白くあ  
す又鯛ハ異よして味もつらにあつてらる

一 十二日より十四日までハあち一草形ハ  
一 十日日暮ハハ丈鳥を俄に少くしてうた  
あけ其うつりしきあふあふの類あハ海中  
たつ出たものなれ多き手業るハいさ  
機織の家ハ其の引とてしき清めり  
鳴といふ丹後織といふ昔丹後の玉の  
してたつりしきあふあふの類あハ海中  
ある木の皮ニ草の葉を染る下染といふ  
凡五十匹よりして扇やくを染るといふ  
の後近もかゝるものもあつりしきあ  
さしの後まてハ五子れといふ野の  
似る鳥をありしりたといふも草の  
まてんして色もあつりしきあふあ  
を染るやといふあけしハ染る  
一 十六日より十九日までハあち一草形ハ

一 十六日より十九日までハあち一草形ハ

一 廿日北嶋は海老多し。またまらぬ多三尺は及い味より中に  
 足長海老とよあつた。是の味ハ替事ハ。まことこゆ  
 をし。鳴人のいふまことよひ。海を煮て食ふ。東都子ある  
 と。いふ。て。所。ま。い。あ。ま。魚。て。魚。教。い。多。ま。い。ぬ。あ  
 一 凡そ魚いあま。う。の。か。ま。ま。よ。れ。る。や。鱈。と。東。都。子。  
 か。ま。事。な。り。ち。い。さ。く。つ。ま。も。わ。ら。ん。の。と。

一 廿一日廿二日かまのこま。

一 廿三日北嶋塩屋。く。と。と。を。ま。り。た。ある。おの。釜。を。は。り。湖  
 水。を。汲。入。て。釜。日。も。く。火。を。た。き。焼。つ。て。一。を。と。る。を。待。故  
 薪。木。ハ。数。の。年。に。あ。や。く。ハ。粉。骨。の。骨。と。ま。の。ひ。て。得。る。而  
 の。一。は。い。つ。つ。ち。る。れ。い。こ。も。鳥。中。の。用。ま。あ。ふ。ん。塩。屋。の。水。  
 湖。水。を。汲。て。乾。々。の。食。よ。つ。る。其。味。い。思。や。い。ぬ。今。度。一。を  
 や。さ。二。人。ま。て。く。い。ぬ。い。ま。あ。つ。て。塩。漬。と。り。い。と。る。む

一 廿五日けしきまひし。等。毒。を。得。り。と。と。指。事。あ。た。さ。三。つ。り。

あり。甲。子。狀。唱。の。文。あり。是。狀。唱。の。毒。な。ら。う。と。う。つ。た。に。性。あ  
 あり。肉。ハ。鳥。人。の。食。と。い。味。あり。

一 廿七日北嶋は高山あり。古く砂ぬき。て。山。と。く。う。と。い。ひ。つ  
 と。つ。つ。ま。い。う。き。う。煙。立。の。名。を。か。こ。り。て。香。爐。山。と  
 名。付。ま。す。ハ。めん。不。肖。う。て。富。岳。子。す。く。似。い。れ。と。て。ハ。大。乃  
 富士。とも。呼。ぶ。あ。ら。も。暗。り。り。多。く。此。山。は。登。る。に  
 絶。頭。ハ。雲。あり。す。く。も。似。る。もの。な。ま。と。母。よ。い。と。國。の。か。こ。な  
 つ。つ。つ。む。の。け。む。も。ま。た。多。ち。の。な。ら。か。と。う。と。う。な  
 目。も。か。い。む。きた。れ。い。い。て。山。と。く。う。ぬ

一 六月朔日大板とよ板あり。ふ。此。板。を。の。は。る。巖。石。の。中  
 と。ま。け。て。道。を。か。て。く。さ。る。り。と。ま。ち。の。名。を。年。ハ。ま。り。前。を  
 夏。あ。て。下。り。つ。の。ほ。つ。つ。此。島。馬。の。一。荒。跡。あり。物。を

破るた嵐をふせく事をと第一とひまは山猫ありてこの猫乃  
よめたあやとあして山は住らうとと雞と誰うあともなり家子居  
近くともありねつとたも山猫の羊村の中へ卵をうむ雞は  
虫と草本の實を食と一猫嵐をさとり食ある處一人は  
五穀をくふの稀ある鳥黙み及ふもあふ深山は天  
見とりよのありて人をあつとんといふ狐付ありとこく  
よの狂りしきよのあはれ天見の心為ことあふ山の  
くさるとのあつと一もあはつん山猫のと一ぬりあるあ  
つてかふるのもあつとやまも鳥多かつと鷺黒松のそと  
ちて國なる鳥はあはれと一またなれ鳥はるたう雞子  
山鳥るく燕は大きく腹黒しと一飛て家は正しくいふ又  
白蟻とソウ虫ありて家につくあるをさつひして目をぬめり  
柱子喰りて修繕あるとふもあふとあふと一あつと  
とつと海をいづれの水とあつと牛家まつあつと  
斗ちる肥ゆるとてちつと一舞い園のうまきありあふ  
じりののちき馬はあつと

一十七日浦より晴るるをてあつとやうの家なり西の方一里を  
二船路は三里斗ふ小島といふあり為朝明神稗産の嶋之地嶋  
も渡海可有と流るつと日おあつとて赤らきたりあつと  
とつとあつとあつと一用意して小船はさつとつとこさ  
あつと手にとつとつとあつと鳥あるは今の内は押はけんといふ  
は波ありと岸より望むは丈鳥は海は山はとつとつと  
て此は時つと流るる川の流の如く波立てるやまの  
矢といふと一是もあつと船甚あつと一と此山は出来  
あつと船もも刀をさつと一近道して小島ありとあつと  
あつと一と海上を駕人の日毎あつとつとあつと

丸をさうしてのりも一ちやまうて船をさうしては引かして  
まこののりかき水練まをれともまのまをさる日ハまれあつと  
一面嶮岨うて登るま道ありまもまらぬ谷の上ま  
いま名へ橋截後して道より岸に船の碇新あり日毎り  
北截し引あつるまはるま目くまらく斗あり男ハま  
まそハ女ハ湖水を汲はむつ子ハ安くまか北島水  
か一岩間ハ清水ありまつ子の用まある魚くもあつた家ハ毎  
ハ大甕をまて雨水を溜り貯へて食をさうのま日とるて雨ありハ  
水絶るあハ丈島より水を運ぶ平地としてハあけまハ岨ハ家居を  
昌少一ありまも二三歩まはる極田のままま牛をひく  
へき道あけしありまも住ハまらまら思ふ其かん  
あんなる又ハ丈島を織うるとまをま見あつる朝明神  
へま申のあまハ丈ハまらま

一十九日今日ハ流人共不獲呼出さるのあつた大まハやせあま  
青さうてまのくまもあまらぬけあまらぬまらぬまらぬまらぬ  
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
ハ助目正一々をあらぬくもあつた殊に世ハあへ目あつた  
あまらぬ人もあつた一山一寺をあらた法師もあつた又あつた  
とらうまのま業まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
戒まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
年月を送るま若御免ありて一度國ハあまらぬまらぬまらぬ  
を樂まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
らまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
の名をけらぬ其非嶋の海まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

光るまつくも願うらん

一 廿日申日初より此の真由つとてけり船をおらんとしてつ  
 つかより告事さうに素りういてさうらての事句れいれ  
 ー食も忘れて又さうめあといくーとありあつるに  
 俄に波立、れいそてさうらとつあつる事船あらん  
 とまらた思ひたさうらる目そつ假乗出事ハ締ありとそ凡波を  
 斗事のひらきしき四地の湊と同日よりあつらん

一 廿日申日初より此の真由つとてけり船をおらんとしてつ  
 るむに急な岸波つきあちよりとそやじ沖ハあさやうに風を  
 一そつもあつる日初より岸の波そ船をおとつらん

一 廿三日申日又右門といふもの有今年ハ十二歳ありらるる子之者  
 兄を言之巫と云弟を又七と云又右門ハ二十年さきより老と云  
 て相事事もわらるる事、兄言と巫跡と取斗ふ事  
 ぬきを地、まも内をみる皆思ひのまゝあつる今ハあつる海  
 一とつとあつるわらわらつるのこつと成てもさつらうに心をいやあ  
 んハ孝意なりける父子うちまうせてさやまひあつる孝養し  
 るりこゝハ鳥の肉ももこつ山海に所句れハ勤ととり萱をかりて  
 あつるさつとあつるかつと又右門光つる不いでもつこつに日を送る  
 事といふ心のあつるや日毎ハ山に入て薪取事さうそれをま  
 山は持り事あつた兄弟ももつたに持わけといふ又廿三日は  
 あつていさ山に申んといふの、度あつたいさもいさん共あつ  
 りてかりも争まする一かりらるる兄弟もあつる夜もい  
 其家内十人あつる句れも父の用ハ兄弟のドて入あつる  
 形一家内皆心をむらつてさつと巫あつてつら  
 一 又喜ハつるもの有、田昌もつらあつるさかあつる百姓あ  
 かわらまらつる人あつるさつと名をまよつとつら



きとれ母の物落すにたゞりものごとくころやなむ云  
れ多しこれにたれ言ふや思給らん八丈嶋よりたる人  
きとれ偽なりと事とまふかあるぬにぬいひい海せ  
る事多しこれに女いつかか又北嶋より限り金銀の  
用なくる品を以取替て用を弁せまる茶ハ國よりおちた  
こハ嶋の産をてあつてきこも紙ハ下敷のよのいほふまなり止  
るのとつと川貫あてきハ髪油元いふぬわい煙州入せり  
皆あきてうる儀物あり申し多し料をもとめんとて衣服と  
まもむかとも嶋中の用を弁せまる各情けあつてくま  
もむむとよハ衣服調度皆女の手業とてとむる及ての物  
とくまきハ女のともちあつてとけいあひて物倉まはる志  
のいももヒツツつらる事と心よかける辺年ころり中困窮つ  
マツル物ハまねともあつてはとれ先ちあつて嶋の  
長ともあつた悉くたつたにありの草子命ハはあうるテイマクラ  
さくるとるに何をしたのしませんといふりあつてか  
きぬる事とほらあつてあつてあつて女の情とらてさうむ  
屋まはるんこれとて其いあひこのむと老ハ本綿ハ海の裕と  
まふつとくまは及つともあつてこれれを者といふもいふん  
まよりハヒツツラとこれのをさうりかざることマヌハむと  
事とテイハいりるきるの之嶋の言葉松多しぬれも  
あつてかあつて下敷のよのいほふまなり入とまなり  
也ハあつてさうり寸氷とこれにたまはあつても其まきける茹  
るころりかきし二三年屋て枯れ事毎子實をむらぬ  
かあつてあつて

一 今度さうして屋きぬるにたより  
さうしてかりとるむらむら日毎子記さるにそのいふ風

吹ある時のまたかきかきてさうかあるん今日丁を能く吹くつと

四ノ内子兩乃降来る風の吹あつて子のこまあつてぬも風も  
船き日ハ一月二日三日ある月も所りあき自もあ

一 七月相日より十三日迄ある一とあり

一 十四日 盆あきた海まうりる事國地は替る事なり

一 盆あきた海まうりる事國地は替る事なり  
あつた州のさふまは腰ゆらりしてこの交あもこの草もつたに

下うぬの男ハヒラとてかきかきかきを著女ハのマタラを

若きりし漆のまき帯を縫いヒツツツをまきり手拍子志ま

に多々舞さぬおうりささふ斗なりまき年子角突させて

勝負をとりさ事年毎乃あそび之取國地は牛とかり

ふかき麦豆の粒まき石を喰せしハカクをりて重たいたた

よくまうて目出度嶋あつたり山焼出して人多く死

田畠さか砂系なる人のまむ屋もあつたハハ大島子遊来りて

人の暇さ嶋とありたり今ハ大島子あつたまむ屋もあつた

て焼あつた砂石をさうりけつり元のおくにせんと御免を請

て進きころく行て住其人の内ハ大島子あつたのりあつて強風

達お厚と死なす今事押しして農具穀物をと積入ハ

くつて四月末船ありたるに汐波なりてり方なくあり

たり小船あり水もわくも走きく目を屋を漂ひたらん船はよ

此も必し死し多ることて帆をあけあつる日を命日とて

跡とむらふりあり運送よくして安宿西へ流付まより

東都へつて御ウらとを象り三宅嶋へ渡りきのお丑寅の風子

帆とよて事おい重根の岸まつて父母妻る兄弟のゆわくと斗こ

とるよちらひあつたときこ北青々島古ハ大島子

属し水も道遠くはありて人多く死するを

あけらう一任ありし所と云あり又言きて信んといふいふあり  
如きやとあり先祖より任馴し師の他ん事と欲まてと事と聞て

ありしはも覚る

一廿七日今日又真物積行船を出んといふ一先きたるう急き波  
備立て船とありはるのかわりす

一八月朔日まきし波まらあり

一二日まきしを真物つと多く船とありを商人の船と共た下ん  
かりより船子便船のものまきし船て六指四人とを聞し一其親

戒ふかハま根の岸に生て名残を惜む見物の人も多群  
集を船のあり白の島まきの水なりとて思ひしは糖ひうさる昔も

碧ぬまきし一漆まきし也とありまきしものまきしとてかけ  
青に日傘とまきしまきし加賀芝お造り花附るもあり参る

白地なりかき碓いしめくといふ船子昔々毎に行来り  
まきしをまきしまきしとて多あり國へ出るもの又あり東都

まきしまきしとて行と名残こそ思ひ厚き道行といふは  
と持てこのの樽あり居て見送る者い岸の岩のまきし

は中をつとむいたうてほとちうに所とてお云うら内まきし船  
とまきしハ船六扇とまきしては招く岸まきし今死しも

行如く色とまきしてまきしまきしゆも実とつるとまきし

一今月もまきしまきしとて廿日ありて待しひのまきしとてあり  
まきしまきしまきしまきし野も思も先づ思ふ人も見

らんといふ國の方ありまきしとて大まきし月日進くといふ  
國の方ありまきしまきしまきしまきしまきしを罪ありて配所

の四と見まきしまきし一鳥のありまきしまきし人の調たりまきし  
まきしまきしまきしまきしまきしまきしまきしまきし

まきしまきしまきしまきしまきしまきしまきしまきし  
まきしまきしまきしまきしまきしまきしまきしまきし

一 十六日曇りて月を見ん

一 十六日平ふらぬあり原とよみ占れりあるたすしうある小鳥の画扇鳥  
とちりててとらうの實をほいさみりつり鳴へしうふさし  
わてまよひしうのぬらうあり

一 廿三日今夜大風雨して家多く吹破りたる大風年々あせなむ  
まの維徳の家と作る大風をまのくるとむ福とんこれ  
かやぬまにうた水木とあふ海一竹まてわくと付さかきせし  
凡まらうるといふ屋根の上へ風の吹くをたおれて形はまきせ  
ら少内はるもくしし屋根のつううまうありて見ん

一 廿四日北嶋のそりさしたる三宅一舟に流るるふふ風き形さう  
船と下れ日わかす一町くまふちて八月も今少しあり北嶋初  
茸多しゆきあうのねまゆき初うけ敷十とせ又まじ  
よよく似るありうておうんとしや鳥くふふの茸を喰ふとよ  
ゆ狂りしありて言ふのほろを好む屋根のうたの根あり  
うらふけよりて毒のつさるうまはあまるとありんといふや  
多むもあうらうの郷

一 八月もやまきて九月朔日形る

一 二日田の面へはまといふ行てうらうまらりあり居てたう翼  
はうきて言へ飛急をわへともさうすめてうらうらまて  
うらうら國地もともかきまてともほをさつうれてまひをまといふ  
るゆり一気おそく八尖島の遠きをまらぬ一中ま一人うちかへて  
こと鳥のあるをうもまうてまらうの鳥といふま又一人かあへ  
は浪をうてまらふありし多南をさして飛たうまらう

はまもあうまらうはああるありあるあうらうらやた  
あししとあうらあうま側うらうらあうらうらあうら  
はいらまかんよこふてこそあうかまきらうらうらあうら

そよと見て身よ入ぬ

一 六日北島より魚とりあり色黒く黄とあひあまるあり居え  
根のあがりよあわつて糸つらに大勢岸よのせみて釣うよく  
あつて釣えぬいき人もあつて見ゆたさ一尺あらずが二尺よりある  
國地まゝのれい魚也あぬいりふれとくさくして下品也ま  
よひを鯛多きあり色正しうつくしく又めたるも似る魚  
あり小魚あり味うきもよりの魚也

一 廿七日より同奉りて九月廿七日まで北月のこもつわつたは  
れは十月に入つて船とあらはれ来奉の四月あつてはとよは北乃  
うよふつて廿七日よりあつてはつとあつと深くいふるにあり  
あんとあつても淋むるにそあつてはつとあつとあつとあつとあつと  
らめて居るもあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
たつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

一 廿三日も沖子船のあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
岸よりあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
そよよあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
ハおせり何れの嶋か渡りあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
らせ次とつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

一 廿四日も風よけはつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
揖取船子きつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
雨降出てあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

一 廿五日けふは雨乃をたつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
午の船もいさあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
帆をたつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
き雲あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
くまのあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

かまぐらつて大雨の際、是龍の湖水をよきよきとて、  
未だハ船甚あやうしとて楫取船子あきまきりあつたあつとく  
ふりし出せしりともあひるし去とも風うく不列く  
み遠さうして海上あうるるりぬほともあく日もくまら磁石  
を多てみ申けしあうてあひ夜の回波あつたかちほくをわら

一 廿六日夜も浪もつれ三宅嶋御藏嶋三奉多けもちうくると今  
朝も三宅嶋へ早くはく屋きを彼あつたして船行を島の長  
ともあま了小船を引よをよめし申の船をくはてあきく客ま

一 九月もつて十月朔日之北嶋野午時多しこも猫氣の  
和毛物向しハ五嶋よりも山さへ平地希之新と志の竹を多く  
東都へ送りて多つきとく其ハ鯨多し姉子造つて東都へ  
送り北嶋へ来つてわら國地を言新しま利島の間より伊豆國  
とこして不ニさ申其申さき宅をつ屋一五月より九月迄

ハ尖嶋とあつた内のはら見え小島のこもて國地ハ元とし  
あつたさうをあつた世心細く覚しつて六月とて不ニさ申  
うらささや家路子神り多るさうり子怪あふまも海中あつた  
魚類をくあつた多しあつた多しあつた多しあつた多しあつた  
まゆまあり

一 けふ六日ものぬ北嶋より中くし堂あり境内ひろくらあつたを  
左右の扉仁王の繪あつらんま竜の画あつたもに英一蝶う筆く  
一蝶北嶋へ配流せしめてあつた内らあつたことハ程あつた  
さうし求たたへてたし價つともあきあふ皆出しあつた今嶋  
一蝶をともてをハ三宅嶋より指あつたあつた一蝶あつたあ  
や北嶋のさうりあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ  
乃よあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ  
一 一つ一つあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

一 美風俗國地しうもるるあり男人大く船乗りてつよ東都

へあふ言東都より十八八丈嶋より大にちとま

一 北嶋よりあひて南の方外里半のみく島あり黄楊木の石

産して國地を用る北嶋より出る人の住ありしも又山も

ありて伐ても跡より茂りて居るまありと昔也年毎又東都へ送

て價とありし海を故嶋人と名るとし北嶋も海より出る

るより大船なるありし小船も海ありしと北嶋のりてま

ありし新客へ渡り給ふべき用意ありとありし風波悪く

廿五日よりなりぬ

一 廿六日申日初より早天より船をありて新島をあり

る雷の音聞ゆ海より船子まをさしてありて其月に

風より向りて船のありし恙なし北嶋より新島より出る

朝船とありて申の船中より著るる岸近くありて風

船ほどありて小船は引きてよりのりて後半はくくま

やとふりてせりしやうあり是は通きうりりありつら

くと陸子禰をとりていさなり

一 島く北山あり北へ島平地あり人住るる地は

白砂なり又白砂山ありとふくのそめい雪のり所は杉方

ゆわけいさきうりあり海も砂のりして石なけり八個あり

三機ありて方角を山よりありて何れも風も網罟

八個地は広く魚も多しあり網罟多し網のり魚名あり

一 北嶋地ありし津津島利島ありしもにあちうの不多し

北嶋も海よりふとありし是も大船をいさるありし小

船より海よりありしありしありしありしありしありし

一 十一月に入て申日十日の海ありしありしありしありしありし

しるしありて根をいり小島に引よりに世の情をわたりしきりに

風ありてあつて近海より遠くもあつてついでに海に

あつて雨凡に谷を掘りて神仏を尊給してより家々に勤

む男の心をたのびし又船乗りて常に東都へ行く女は岩山

程を出て勤めをとり農業一夜の多をとり夜せしをたた

らんと春をとりて草中をとりて女はうりけぬあつて此

し向の女は春ぬものごとく守りてあつて正の月一其の

追ひてきつて又女の首をかありて三十貫もあつたとあつて

いしきおれたらうと屋をあらうとつむりにのせてある斗の重

を指し降の笠のしんにのせて持白の音をたたくも其の

あつていさつともと多く他味勝さう東海もあつて此

あつていさつともと長く貯やあつて又保も造る木の粉

少しはる程いさつとも此さつともいさつともいさつとも

あつていさつともいさつともいさつともいさつともいさつとも

あつていさつともいさつともいさつともいさつともいさつとも

一 此島雄子多し庭を弄りてあつてあつてあつてあつてあつて

鳴のふ字かきりて作り多るとおもつて又水仙寒菊の道りや

植根ありてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

葉もあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

香る氣のしつて喰ひ香氣つとく少くもあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

一 此島のもも残る所ありてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて



こきあを嫌しやしろくろくろつえんよふも又厚くくと  
 面をきて毎えの舟へ流きゆくといふせんと思ふはま申る  
 の風あて風はうらうらと何とてして安房の西へうらんと帆を  
 一とよのうり舟もやその風来つてあまふ婦こりて帆を  
 けらたに船をくろくろんとんるも三度ことうくきうら風  
 吹せうらいぬれはあまうらまけしして帆をあつてとる人  
 する也しとてしてうらうらたたしはめ申すうら凡三十里  
 もあつてとてして更に相刺浦賀のこゝに迫りて申すけふ申  
 るの言より吹ぬれはかちを也し帆は廣舟の言へりて又申す具  
 ちうしにかち押し成妻の言さしてとてうら船はよふこも  
 かにむきて今もくろくろんとぬふらうらこ出るも  
 彼のましら舟中をおき免くうらうらておそら  
 ら水てうらに流されつる夜の間の事なり



